6-8			
主題	フロア環境変化が利用者に与える影響と PEAP を用いた取り組み		
副題	利用者が楽しめる環境づくり		
キーワード1	環境	キーワード2	PEAP
		研究(実践)期間	4ヶ月

法人名	社会福祉法人 府中西和会		
事業所名	特別養護老人ホーム 鳳仙寮		
発表者(職種)	清水直紀(介護職員)、三田真央(介護職員)		
共同研究(実践)者	有馬樹里(介護職員)		

電話	042-360-1353	FAX	042-360-1353
----	--------------	-----	--------------

今回発表の事業所やサービスの紹介	定員 50 名の小規模な施設の特徴を活かし、どなたでも安心して生活して頂けるよう楽しく明るく家庭的な雰囲気です。個室・2 人室・4 人室があり本人の意向や健康状態、ご家族の要望等を鑑み最良の介護を行うように努めています。
------------------	--

《1. 研究(実践)前の状況と課題》

当施設では、2 階一般フロア、3 階は認知症フロアを有している。開設から 14 年経ち入居している利用者の重度高齢化が進んでいた。それに伴い、「どこかに行きたい」「美味しい物食べたい」等といった声が少なくなってきた。上手く表現できない利用者の声なき声に職員が寄り添えていないのではないかと考えた。今までの取り組みは、長い廊下を活かした掲示物(利用者の出身地、地域のお知らせ、施設の行事、職員の旅行先で見てきたもの)を作成していた。それを更新、評価する機会がなかったためマンネリ化の課題があった。その為、キャプション評価表(日常評価の中の一場面を写真として切り取って分析し、課題ごとにまとめる手法)を活用し生活環境と掲示物を評価、更新していくこととした。

上記の方法を活用しながら施設の住環境づくり(以下、PEAP)に取り組む。

《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

食堂以外での季節感の感じられる装飾、レイアウトを考えた。

- ①長い廊下を活かし、目的をもって歩行すること。
- ②興味ある掲示物によって利用者より、あそこへ行ってみたいといった外出等に対する意欲の向上。
- ③掲示物を工夫させることで PEAP を充実させることを目的とする。
- ④2 階と 3 階フロアで貼り方の統一がされておらず、利用者の見やすさや安全面に配慮した掲示方法が出来ていない。

このような課題に取り組むことにより、利用者が外で様々なものを見たいという意欲を持って廊下を歩かれたり、車椅子を自操する機会が増えることが予想される。

《3. 具体的な取り組みの内容》

掲示物に対し、利用者が何を感じ、楽しみ、どのような掲示物に興味を持っているのか職員アンケートを実施した結果から掲示物のテーマを選定。以下に取り組む。

①アンケートの結果2階、3階フロア共通のものとして季節の飾りを制作（3・4月は桜、5・6月は紫陽花）。

観葉植物等の造花をソファの隣に設置。今までは職員が作製していたが、利用者を交えての作製を行った。

②各地域ごとの名物や特色を記載した掲示物、4文字熟語クイズの制作、近隣公園をマッピングした地図、公園ごとの特色を記載した掲示物を作製、掲示をした。掲示場所として利用者が集まる場所、通ることが多い廊下西側部分をメインの掲示場所とした。

③掲示方法は利用者の目の高さに合わせ、画鋲を使用しない掲示方法に統一。

④掲示後、利用者に声を掛けながら掲示物の内容と場所を知ってもらい、1週間休憩室にキャプション評価を実施。

《4. 取り組みの結果》

・利用者の反応

掲示したことにより、利用者より「華やかになったわ」と喜ばれたり、「これなんですか？」といった話から説明をされる方が見られた。造花や観葉植物からは見て、触れて、話をするといった様々なリアクションが引き出せていた。公園・地域の飾りには「近くにこんなところあるのね」「こんなところの料理食べてみたいわね」といった興味を惹かれる反応が引き出せた。クイズの飾りではエレベーター前へ張り出したことにより、待ち時間に利用者同士で考え話の種になった。

・職員の反応、評価について

「季節感が出て涼しく感じた」、「変化が楽しめた」といった前向きな意見が多く寄せられた。キャプション評価について、その写真を載せることにより何について評価をしているか詳しく理解し、より細かな意見が集められた。

《5. 考察、まとめ》

興味を持って掲示物を目的に歩行され、そこに集まった利用者同士のコミュニティが出来つつあった。新たに利用者と共に職員が掲示物を積極的に行き姿が見られた。しかし、制作に関した職員とあまり関らなかった職員で利用者と同じくバラつきがあった。また、移動介助が必要な方に時間等の問題からゆっくりと見て頂けることができなかった。クイズは答えを覚えた方が多く飽きがきてしまい定期的な張り替えが必要といった問題もみられた。

成果としては、職員の装飾に対する関心も増え、装飾作製に対する意味、意識の向上につながった。業務時間の都合により、評価後の更新、作製に追いつかないとの意見があり、それをすぐに変えられない事が今後の課題である。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人(ご家族)に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

「PEAPにもとづく認知症ケアのための施設環境づくり実践マニュアル」(2010年7月) 児玉桂子・古賀誉章・沼田恭子・下垣光編集、中央法規

《8. 提案と発信》

普段から職員、利用者共に生活している場として、時間に追われる中変化が少なくなってしまうがちな施設(フロア)環境。一人一人の想いを形作ること、そこへ懸ける職員の想いは少なからず利用者、他職員へ届き、お互いに良き相互作用が生まれ、より良い施設生活を送れることを伝えたく紹介した。